

## 基調講演「豊かな人間性の育成に資する動物飼育」

赤堀 博行



みなさんこんにちは。

最近の動物にかかわるニュースで、非常に残念なことがありました。それは盲導犬のオスカーが、心ない人に刺されたという事件です。刺されてすぐに鳴けば良いのに、その事実がわかるまでじっと我慢していたという、まったくやるせない事件でした。刺した人の気持ちが私には理解できません。本当に悲しいことです。


それから、朝の連続テレビ小説で悲しい出来事がありました。それは、主人公が飼っている愛犬が軍用犬として徴用されてしまったことです。別れ際の犬の表情を見て、私は胸が熱くなりました。

さて、私たちは昔から動物と関わって生活しています。動物とのかかわりは、子どもたちの健全な成長にとっても大きな役割を担っているのではないかと思います。本日のテーマは、「豊かな人間性の育成に資する動物飼育」ということです。豊かな人間性というのは、学校教育だけではなく我が国で行われる教育の方向性の一つとして示されているもので、教育基本法の中にも「豊かな人間性をはぐくむ」ということが記されています。したがって、学校教育だけではなく、家庭教育でも社会教育でも、豊かな人間性をはぐくむことが重要な役割となっております。

では、「豊かな人間性」とはどのようなことであるかということを考えてみたいと思います。本日は、幼稚園や小学校の先生方もたくさんいらっしゃいますが、幼稚園や小学校の教育目標の中に、「豊かな人間性をはぐくむ」とか、「豊かな心を育成す

**豊かな人間性**

- ★ 美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性
- ★ 正義感や公正さを重んじる心
- ★ 生命を大切にし、人権を尊重する心などの基本的な倫理観
- ★ 他人を思いやる心や社会貢献の精神
- ★ 自立心、自己抑制力、責任感
- ★ 他者との共生や異質なものへの寛容
- ★ 道徳的価値を大切にする心



る」というような言葉が、おそらく入っていると思います。以前、私はある学校の先生に、学校目標として掲げている「豊かな人間性」について質問したことがあります。そうしたら、「人間性が豊かなことですよ。」と答えられました。確かにそれはそうですね。具体的にどうなのかと聞いてみたら、「さあ・・・」と言うのです。私も困惑してしまいましたが、確かに教育基本法の中には、豊かな人間性に対する具体的な説明はありません。「豊かな人間性」については、中央教育審議会の答申の中で示されており、たとえば、「美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性」、「正義感や公正さを重んじる心」、「生命を大切にし、人権を尊重するなど、基本的な倫理観」、こういったことが豊かな人間性ということです。さらに、「他人を思いやる心や社会貢献に資する心」、「自立心、自己抑制力、責任感」、「他者との共生や異質なものへの寛容」、「道徳的価値を大切にする心」などこんなにたくさんあります。ですから園や学校の教育目標に、「豊かな人間性」という言葉が入っているとすれば、今申し上げた具体的内容のどこに重点を置いていくのかということをお各園や学校で考えて教育していく必要があります。

さて、動物飼育が今申し上げた内容のどの人間性を養っていくのかということについては、皆さんもうおわかりのことと思います。ただ、ここで大切なことは、動物飼育をして何が養われるかということではないのです。学校として、どのような人間性

を育てていきたいのか。こちらを先に考えなければいけないのです。たとえば、他人を思いやる心や社会貢献の精神を育てていきたい、ということであれば、そのためにどのような教育活動を行えば良いのか、という順で考えていく必要があります。そう考えたときに、動物飼育の役割は大きいものがあると思います。

教育基本法の第1条の教育の目的では、人格の完成を目指しています。少し聞いてみましょうか。すでに人格が完成された方はいらっしゃるでしょうか？そんな方はなかなかいないですよ。では、人格はいつ完成するのでしょうか。もしかしたら、完成されないまま人生を終えてしまうのかもしれないし、完成していないという方が、実は完成しているのかもしれない。人格の完成というのは方向性の問題で、人格の完成を目指して教育を進めていきましょう、ということなのです。その過程において、豊かな人間性というのは備えておきたいことのひとつなのです。

では、どうすれば人格が完成するかということ。そこで、目標が出てくるわけです。たとえば、「幅広い知識と教養を身に付ける」、「正義を求める態度を身に付ける」、「豊かな情操を養う」、「道徳心を育てる」、こういったことをしっかりやっていくことで、人格の完成につながるということです。みなさんの園や学校でも、このようなことに資する活動は行っていると思います。では、豊かな情操はどのようにして養っていますか？ある中学校の先生が、「以前は豊かな情操を養っていたが、今は生徒が荒れてきたので、養っていない」と言うのです。しかし、たとえば音楽や美術などは授業として行っていますが、これらの教科は豊かな情操を養うためにやっているのであって、このようなことは学校教育の中ではほかにも必ずあるはず。また、「勤労を重んずる態度」というのは幼稚園ではまだやっていないという先生もいるかもしれませんが、たとえば、「動物の世話をすること」は勤労を重んずる態度を養うことにつながるのでしょうか。

このように豊かな人間性をはぐくむことは、道徳教育が大きな役割を果たすこととなります。現在、どの学校種においても、「生きる力をはぐくむ」ということを目標として教育活動を進めているところ。

この「生きる力」には3つの要素があります。「確かな学力」、「豊かな人間性」、「健康・体力」です。これらの力をはぐくむために、道徳教育が大きな役割を担っています。

道徳教育は、学校の教育活動全体で行うことになっています。つまり、道徳の時間という授業だけではなく、国語や算数などのほかの教科の中でも道徳教育を行うことになっていますし、特別活動や総合的な学習の時間の中でも行うことになっています。すなわち、あらゆる教育活動の中で、道徳教育をしっかりと行うということになっています。しかし、「道徳の時間」は、小学校と中学校にしかありません。そして、「道徳の時間」に行う内容は学習指導要領で決まっていますが、学校全体で行う道徳教育の内容は決まっています。つまり、このことについては、学校で目標を定めて計画し、実施するということです。たとえば、うちの学校は思いやりの心を育てる、ということを中心にしていくという学校もあれば、規範意識を高めるということを重視する学校もあるというように、学校によって視点が違ってくるわけです。このような視点を定めるために何が重要かということ、学校としてどんな子どもを育てたいのかということになります。そのような思いがないと、学校としての道徳教育を推進していくことができなくなります。道徳教育は人間性をどう育てるかという教育を行うわけですが、道徳の時間の授業以外で道徳教育を行う場合は、学校として、どのような人間性を育てるのか、具体的にどのような教育活動を行うのか、それをいつ実践するのかなど、すべて学校で決めなければなりません。とても難しいことだと思います。国語や算数などの教科の内容は決まっているので、どこの学校に行っても、程度の差はあれ、同じ教育を受けられます。しかし、道徳教育に関しては、学校それぞれで異なってきます。しっかりと重点を定めて実践している学校もある一方で、なかなかそのような状況になっていない学校もあります。保護者の方々からすれば、どの学校に子どもを預けても、同じような教育をしてもらいたいと思っています。ところが、ある学校では道徳の時間の授業をきちんとやっているが、ある学校ではやっていないとなると、本当に子どもたちの健全

な心を育ててもらえているのか、不安になってしまうのではないのでしょうか。だから、道徳を新たな枠組で教科という形にして教科書をつくることで、先生方はしっかりとやらなければならないということになります。現在では、先ほども申し上げたとおり、学校独自で道徳教育を進めていかなければなりません。ですから、先生方にどのような子どもを育てたいのかという思いをもっていたきたいのです。思いをもつことで、道徳教育のポイントが明確になってきます。ポイントが明確になれば、先生方はそれに向かって子どもたちを指導していくことができるのです。

現在、4つの視点で小中学校の道徳の内容を示しています。一つは自分自身のこと、これが基盤となって二つ目は他者とのかかわり、三つ目は自然や崇高なものとのかかわり、四つ目は集団社会とのかかわりにつながります。内容としては、小学校1、2年生では基本的な生活習慣、あるいは努力とか正義とかですね。さらに明るい心で生活するということがあります。これが高学年になるにしたがって、内容も多岐にわたるようになっていきます。このようなことを、道徳の時間の授業とは別に、何を通して行うのかということになるわけですが、このことは学校が決めることになります。

さて、道徳の内容の中で、動植物愛護にかかわることがあります。まず、どうしてこの内容が置かれているかということですね。古来、日本人は、自然の恵みに感謝をして、自然との調和を図りながら暮らしてきました。そして、自然に親しみ、動植物が自然の中でたくましく生きてきたという自然の巧みさに学んで、自然と一体になりながら、動植物を愛護し、豊かな情操を育ててきました。私たちも自然の一員として、自然とのかかわりをしっかり考えながら生きていかなければならないということです。自然や動植物を愛し、自然環境を大切にしようとする態度を、私たちはこれから次世代に引き継いでいくことが必要です。現在、地球環境の悪化が叫ばれていますが、だからこそ、自然を愛し、自然を保全する態度をしっかりと育てていくことが必要です。このように、小学校1年生から中学校3年生まで系統立てて指導していくということになっています。

小学校の部分だけ少しご紹介します。1、

2年生で目指すことは、身近な自然に親しんで、動植物に優しい気持ちで接するということです。そのために、実際に動植物にふれる体験をすることが必要になってきます。道徳の時間では、このことに特化して学習をしていくわけですが、日頃の教育活動全体では、どのような視点で、どのような方法でこれを実践していくかを、学校が独自に考えていく必要があります。その中で、動物飼育が果たす役割は大きいと思います。3、4年生になると、自然のすばらしさや不思議さに感動して、自然や動植物を大切にするという内容について学びます。反面、過日の台風のような自然の恐ろしさや不思議さなどを含めて、感じ取れるようにするということです。そういったことに基づいて、自然や動植物を大切にすることをさらに深めていくのです。5、6年生になってきますと、動植物愛護についてはもちろんのこと、自然の偉大さを知って、自然環境を大切にすることで、人間の力が及ばない自然の偉大さを理解し、自然に学ぶ態度を身に付けるということを目指していきます。そして、自然環境と人間とのかかわりから、人間も自然の中で生かされているということを学び、自分でできることを考え、しっかりやっていくということが大切なことです。

では具体的に、動植物愛護の精神を育てるために、授業の中でどのような教材を使うのかということについて、いくつかご紹介をします。旧文部省の時代から、道徳の時間の授業を進めるにあたって、私たちはいろいろな資料を提供しています。その中に、動物がかかわるものもあります。古い資料で恐縮ですが、「いなくなったシロ」という教材があります。

このような話を使って、授業の中で動物との接し方を考えさせていくんですね。シロがいなくなってしまうとき、「私」はどんな気持ちなんだろう？と1年生の子どもたちに聞くと、そのときに「悲しくて、悲しくてしかたありませんでした。涙が止まりませんでした。」と子どもたちは発言しました。それから、先生が「どうしてそう思ったの？」と聞きました。「悲しくて、悲しくて泣いてしまったと、ここに書いてあったからです。」という答が返ってきました。これでは道徳の授業とは言えません。このお話を読み解いていただけたらと思います。

す。子どもたちにはどのような思考をしてほしいかという、子どもたち自身の動物とのかかわりを考えてもらいたいのです。

「私」が飼っていた生きものがいなくなってしまうとき、そのときはどんな気持ちだったろう？というように、自分とのかかわりの中で考えてもらいたいのです。それを考えるとき必要なことは、やはり動植物との直接的にかかわる体験なのです。そのような体験がないと、自分のこととして考えることがなかなかできない。だからこそ、子どもたちの動植物たちとの触れ合いの体験が必要なのです。

次は「キリンさんごめんね」というお話です。このお話は、実は動植物愛護のお話ではなく、「決まりをしっかりと守りましょう。」というお話です。これは、決まりについて子どもたちに考えさせる授業ですが、この主人公の「まさおくん」の気持ちになって考えられるかどうかは、やはり、動植物との触れ合いの体験があるかないかで大きく違ってくると思います。このような動物にかかわる道徳の話は結構たくさんあります。

さて、これは今年の4月に子どもたちに配布しました、「私たちの道徳」という教材です。これは、小学校1, 2年生, 3, 4年生, 5, 6年生用に分かれています。すでに学校の先生方をご覧になっているかもしれませんが、幼稚園の先生方をご覧になったことがないかもしれません。この教材は市販もしていますので、書店でお求めいただくこともできます。また、文部科学省のホームページを見ていただくこともできます。この中にも、動物にかかわる教材がいくつか入っています。たとえば、「お墓参り」というお話があります。アフリカゾウは、死ぬ時期がわかると、群れから外れてゾウの墓場に向かい、そこでひっそりと死んでいくという内容です。しかしそれを仲間がしっかりと見守るのです。このお話から、私たちが学ぶところもあるし、あるいは、家族とのつながりの大切さを示す内容でもあります。

別のお話で、「ハムスターの赤ちゃん」というのがあります。これは、命の大切さを理解させるお話です。ハムスターの赤ちゃんが生まれると、お母さんのおっぱいを一生懸命吸っている。毛も生えていないし、目も開いていない。本当に育つのだろうか。

## 私たちの道徳



とこの書き手の子は思うわけです。そしてお母さんが赤ちゃんを口にくわえている。お母さんの歯は、ひまわりの種をバリバリ噛んでしまうほど強いから、本当に赤ちゃんは大丈夫なのだろうか心配になります。でもお母さんは赤ちゃんをそっと噛んでいるように見えるので、きっと大丈夫だと思います。赤ちゃんを宝物のように守っているのだと理解します。それから10日が経ち、赤ちゃんの体はとても大きくなってきました。体に毛が生えて、背中の模様がよくわかるようになりました。それぞれの赤ちゃんは皆違う模様だということもわかってきました。このお話をとおして、生きている証を学んでいきます。ハムスターの赤ちゃんの成長の様子をもとにして、自分も生きていて良かったと思えるようになる。そういう授業を展開していくための教材です。



これは、シロクマのピースのお話です。愛媛県の動物園で、育児放棄をしてしまったシロクマの赤ちゃんを、飼育員さんが一生懸命育てました。このことを、低学年のコラムとして取り上げています。そこにはこのように書かれています。「動物には人間と同じ命があります。ペットとして飼っ



たら、最後までしっかりと育ててください。命のある限りしっかりと育てていくことが大切なのです。」ということが、飼育員さんの言葉として載っています。そして、3、4年生では、動物や植物の生命の力を感じることが大切であるということが掲載されています。これは動物飼育とは直接関係ありませんが、アスファルトを破って出てきた大根の芽という例をもとに、自然の力を感じ取れるようにする教材です。そして、自分たちが動植物を飼ったり育てたりしたことを書くということもできるようになっています。

これは、盲導犬のお話です。盲導犬自身が目が見えなくなってしまった。したがって、盲導犬としての役割を担うことができない。そのときにその家族はどうしたかという、今度はその家族の子どもが盲導犬の目になってあげるというのです。このように、家で飼っている盲導犬との絆を考えさせるというページもあります。

さらに高学年になっていくと、自然環境にも目を向けさせる授業を行っていきけるような展開になっていきます。

中学校では、人間の力を超えるものとして、自然の神秘を考えさせる内容になっています。当然、様々な動物飼育にかかわること、例えばコウノトリのプロジェクトなども、コラムとして取り上げています。

ということで、「私たちの道徳」においても、動物飼育にかかわることが随所に取り上げられています。

では、動物飼育をとおして養われる豊かな心を考えていきたいと思えます。最初にも申し上げましたとおり、学校の教育活動は、教育活動の結果何が育つのかということではなく、学校として何が育てたいのかということが先です。たとえば、思いやりの心を育てたいから、こういう教育活動をするということを考えることが必要です。いろいろな学校で動物飼育が行われていますが、動物飼育をしたからこういう子どもが育てられると考えられなくもありません。しかし、思いやりの心を育てたいから、動物飼育をするという考えで、教育活動をしていただきたいと思えます。いろいろな学校で飼育活動が行われていることに対して、それが何のために行われているのかということが大切です。それは動物のために行っているのではありません。それは、豊

かな学校生活を送るためにやっていることです。たとえば、高学年の児童が中心になって飼育活動をしていることで、低学年の児童たちが楽しい学校生活を送ることができるというようなことです。当然、こういった飼育活動を行えば、動物たちに対する愛着も生まれてきます。

学級内の飼育係は人気がありますよね。しかし私が小学校に勤務しているときにこんなことがありました。私自身指導に困ったケースです。飼育係がキンギョの水槽を掃除していました。そこである児童が、水槽をととてもきれいにしてあげたいからと、石けんを使ってしまいました。そうしたら、キンギョが死んでしまいました。皆さんならどうしますか？キンギョの気持ちになってやったことなので、その児童の気持ちは大切にしたいのですが、一方で、そのような環境に置いたら、キンギョが死んでしまうという、知の部分もしっかりともたせなければいけないのです。つまり両方が大事なのです。ある先生からこんな話を聞きました。ある児童が、キンギョが寒くてかわいそうだからと、水槽の中にお湯を入れてしまったのです。このことについても、その児童の気持ちはとても大切だけれども、知の部分もしっかりともっていないならぬのです。

そんな様々な活動をする中で、いったいどのような道徳性が養われるのかということ、たとえば、自分がやらなければならないことは最後までしっかりとやるという心が養われます。また、友達と協力して飼育することで助け合うことの大切さも学びます。さらに、動物にどのように接することが良いことなのか。ということの学びから、良いことと悪いことの区別もできるようになります。このように、動物飼育は優しい心を育てることができます。それ以外にも、たくさん育てることのできる心があります。しかしそれは、指導する先生が意識していないといけません。たとえば、夏休みなどの暑い時期に動物飼育をしている児童たちの態度を、先生がきちんと価値として認めてあげなければいけないのです。

これだけではありません。高学年で飼育委員を経験することで、自分の役割をしっかりと認識することができるようになったり、あるいは学校全体のことを考える、下級生のことを考えるという、思いやりの心

もはぐくまれたりするし、病気になったときなどに治療をしてくれる獣医師さんたちに対する感謝の気持ちもはぐくまれていきます。そこで大切なことは、先生がどのような言葉かけをするかです。獣医師さんにお世話いただくときは、生命に直面する場面があったりします。そこで、感謝の気持ちをはぐくまれるような言葉がけが必要なのです。このようなことで、まさに、学校・園が楽しくなるということにつながっていきます。



このように、動物飼育に含まれている教育的価値は、相当たくさんあります。ですから、指導される先生がそれをしっかり確認することが必要です。このような様々な活動をとおして、子どもたちの活動を、どう価値づけるかということが大切になってくると思います。

あと一つだけお話をして終わりにしたいと思います。学校で、先生たちが意図的に動物飼育の指導を行うことで、子どもたちの豊かな心をはぐくむことができます。その中で、大人たちもそうですが、「察する」ということを忘れてしまいがちです。最近のペットブームで犬を飼う人が増えていきます。実は私も飼っています。犬の登録頭数は、平成19年度から6万頭以上増加しています。全体で680万頭を超えたそうです。また、平成12年度からは100万頭以上になってきています。犬は古来より人間とともに生きてきました。犬はペットだけでなく、警察犬や盲導犬のように、ワーキングドッグとして、人の手助けをする犬もいます。また最近では、人の心と体を癒すセラピード

ッグも医療や福祉の分野で活躍しています。犬嫌いな人はともかく、子犬を見ると、多くの人たちが優しい気持ちになります。思わず声をかける人も少なくありません。なぜ人は子犬を見ると優しい気持ちになれるのでしょうか。それはたぶん、犬が言葉を発しないからです。愛くるしい犬の様子を見ていると、人は犬が何をしてほしいのか、犬の気持ちを推し量ろうとします。このことが、きっと、人の気持ちを優しくする要因なのではないかと思えます。言葉を発しない乳幼児を見ると、人は思わずほほえみたくなります。つまり、その乳幼児が何をしてほしいのかを察し、優しい気持ちになるのです。人は、相手を思いやることで癒やされ、優しい気持ちになれるのではないのでしょうか。

子どもが成長して言葉を発するようになると、私たちはその言葉を投げ所にして、その子が何を考え、何を求めているのかを判断します。すると、言葉で判断するので、その気持ちを察することが少なくなります。昨今、子どもたちのコミュニケーション能力の低下が問題になっています。もちろん、学校教育の中で、言語力を高めることも大切ですが、先生方が子どもたちの気持ちを察してほしいと思えますし、子どもたちにも人の心を察する気持ちもはぐくんでほしいと表います。と

そういう意味から考えてみても、動物飼育はとても大事だということがわかんと思えます。小さい頃から、ものを言えない動物に接していくこと。その中で、動物たちの気持ちを察すること。このことで、豊かな人間性をはぐくむことにつながるのではないかと思えます。

せっかく行っている動物飼育の教育的価値。これをもう一度確認していただいて、各学校で有意義な飼育活動を行ってほしいと表います。

これで、私の話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

(文部科学省 初等中等教育局 教科調査官  
／国立教育政策研究所 教育課程研究センター 教育課程研究官)